

ロシア語の経験者と格構文と主語特徴*

山田久就

1.はじめに

ロシア語や日本語など対格言語（主格・対格型の格配列を持つ言語）では、二項他動詞構文や一項自動詞構文をはじめとする中心的と考えられる構文で、主格名詞がいくつかの統語的特徴を独占的に持っている。例えば、「再帰代名詞の先行詞になることができる」。このような統語現象は、基本的な構文における主格名詞を「主語」として、主格以外の格を持つ名詞から区別することの根拠になるとよく考えられている。そして、上述のような統語的特徴は「主語特徴」とよく呼ばれている。

しかし、主語特徴（中心的な構文で主格名詞だけが示す統語的特徴）は、受動態構文を代表に、周辺のと考えられるいくつかの構文で興味深い分布を見せる。周辺の構文では、主格以外の格を持つ名詞がある主語特徴を示したり、主格名詞がある主語特徴を持っていなかったりすることがある。本稿では、ロシア語の周辺の構文の一つである、経験者と格（以下、E(xperiencer) D(ative)）構文に焦点を当てる。ED 構文とは、(1)-(3)のように、一般に「経験者」と呼ばれる意味役割を持つ与格名詞を含む構文である¹。(1)(2)では動詞が、(3)では形容詞が述語として用いられている。

(1) Ivanu nravitsja Tanja.

Ivan・D 好きだ・PR Tanja・N 「Ivan は Tanja を好きだ。」

(2) Tane xotelos' spat'.

Tanja・D たい・PA 眠る・INF 「Tanja は眠りたかった。」

(3) Mne xolodno.

私・D 寒い 「私は寒い。」

ロシア語の ED 構文では、(1)-(3)の他、dumat'sja（思える）、kazat'sja（思える）、vspominat'sja（思い出す）、slyshat'sja（聞こえる）、snit'sja（夢で見る）などの動詞、vesel-（楽しい）、grustn-（悲しい）、xorosh-（気分がいい）、plox-（気分が悪い）、styd-（恥ずかしい）、zhalk-（かわいそうだ）、vidn-（見える）、slyshn-（聞こえる）、nuzhn-（必要だ）など

の形容詞が述語として用いられる。ED 構文は、ロシア語を含むインド・ヨーロッパ語族の諸言語、コーカサスの諸言語、インドの諸言語などに見られる。また、日本語においても「わかる」「見える」「聞こえる」「(ら)れる」「できる」「要る」「必要だ」などを述語とする構文が ED 構文であると考えられる。

いくつかの言語に関して、主語特徴の観点から ED 構文の研究がなされている。ED 構文では、ED 名詞がある主語特徴を示したり、主格名詞がある主語特徴を示さなかったりすることが報告されている。ED 構文における主語特徴の分布は、言語間でかなりの違いがあるようだ。本稿は、ロシア語の ED 構文における主語特徴の分布を明らかにして、他の言語と比較することを目的としている。ロシア語との比較の対象にする言語は、日本語、グルジア語（南コーカサス諸語）、カンナダ語（ドラヴィダ諸語）、ヒンディー語、マラティー語、ポーランド語、イタリア語、フランス語、ドイツ語、アイスランド語（以上、インド・ヨーロッパ語族）である。

本稿の構成は、次の通りである。2 節でロシア語の主語特徴を提示するとともに、先行研究について言及する。3 節から 5 節でそれぞれの主語特徴が ED 構文でどのような分布を示すかを明らかにする。そして、6 節で 3 節から 5 節のまとめを行う。

2. ロシア語の主語特徴

次に挙げる 8 の統語的特徴は、ロシア語の中心的な構文で、主格名詞だけが持っていて、主格以外の格の名詞は持っていない。したがって、主語特徴と呼ぶことができる。①再帰代名詞の先行詞になることができる。②人称代名詞の先行詞になることができない。③所有再帰代名詞の先行詞になることができる。④三人称の所有人称代名詞の先行詞になることができない。⑤分詞関係節で関係節化されることができる。⑥不定詞従属節の複文でコントロールのターゲットになることができる。⑦ *tak ... chtoby [...V<INF>...](so ... as to)* などの複文でコントロールのコントローラーになることができる。⑧ *pered-tem kak [...V<INF>...]*（～する前）などを従属節とする複文でコントロールのコントローラーになることができる。3 節から 5 節では、ED 構文の ED 名詞と主格名詞が上の 8 の主語特徴を示すかどうかを明らかにする。他の言語においても同じであるが、ロシア語においても、ED 構文で、ED 名詞と主格名詞以外の名詞は全く主語特徴を示さないので考察の対象から外すことにする。

ロシア語の ED 構文に主語特徴の観点から体系的に言及している研究に、Bachman(1980)、

Perlmutter(1982), Kozinskij(1983)がある。Bachman(1980)は①③⑧に、Perlmutter(1982)は①③⑥に、Kozinskij(1983)は①③⑤⑥に言及している。また、①③を個別的に扱っている研究がいくつかある。先行研究の多くには次のような大きな問題点がある。Perlmutter(1982)以外では、考察の対象が例文(2)(3)のような主格名詞を含まないED構文に限定されており、例文(1)のような主格名詞を含むED構文が扱われていないことである。そのために、ED名詞に対する考察も不十分であるとともに、ED構文の主格名詞に対する考察はほとんどなされていない。この他にも、先行研究には記述が十分でない点がいくつかある。本稿では、先行研究の不十分な点を補って適切な一般化を目指す。

3. 代名詞と所有代名詞

この節では、代名詞および所有代名詞について議論する。3.1.で再帰代名詞と人称代名詞に関係する統語的特徴①②を問題にし、3.2.で所有再帰代名詞と所有人称代名詞に関係する統語的特徴③④を問題にする。

3.1. ロシア語の中心的な構文では、主格名詞だけが統語的特徴①「再帰代名詞の先行詞になることができる」を持っている。(4)が示すように、主格名詞は再帰代名詞の先行詞になることができるが、主格以外の格の名詞は再帰代名詞の先行詞になることができない。

(4) Ivan_i udaril . Sashu_j u sebja_{i,i}/nego_{*i,j} v komnate.

Ivan・N 殴る・PA Sasha・A の所で 自分・G/彼・G で 部屋・L

「Ivan が Sasha を自分／彼の所で、部屋で（自分の／彼の部屋で）殴った。」

反対に、ロシア語の中心的な構文において、主格以外の格を持つ名詞は人称代名詞の先行詞になることができるが、主格名詞は人称代名詞の先行詞になることができない。したがって、主格名詞だけが統語的特徴②「人称代名詞の先行詞になることができない」を示す。上の(4)で、主格名詞は、人称代名詞の先行詞になることができないが、対格名詞は人称代名詞の先行詞になることができる。

アイスランド語 (Zaenen et al. 1985)、ヒンディー語 (Mohanani 1994)でも、基本的な構文において、主格名詞だけが統語的特徴①②を示す。また、日本語 (原田 1973、柴谷 1985、Takezawa 1987、角田 1991)、マラティー語 (Rosen et al. 1989)、カンナダ語 (Sridhar 1979)、

ポーランド語 (Dziwirek 1994)、グルジア語 (Harris 1981) で、基本的な構文において、主格名詞だけが統語的特徴①を示す。

それでは、ED 構文ではどうなっているのか。ロシア語について述べる前に、他の言語についてまとめると、次のようになる。アイスランド語 (Zaenen et al. 1985)、ヒンディー語 (Mohanan 1994)、日本語 (原田 1973、柴谷 1985、Takezawa 1987、角田 1991)、マラティー語 (Rosen et al. 1989)、カンナダ語 (Sridhar 1979)、グルジア語 (Harris 1981) では、ED 名詞は統語的特徴①を示すが、主格名詞は統語的特徴①を示さない。それに対して、ポーランド語 (Dziwirek 1994) では、ED 名詞と主格名詞の両方が統語的特徴①を示す。統語的特徴②に関しては、アイスランド語 (Zaenen et al. 1985)、ヒンディー語 (Mohanan 1994) で、ED 名詞は示すが、主格名詞は示さない。

ここで、ロシア語の ED 構文に移ることにする。(5)-(8)で ED 名詞は再帰代名詞の先行詞になることができる。それに対して、(5)(6)では ED 名詞が人称代名詞の先行詞になることができないが、(7)(8)では ED 名詞が人称代名詞の先行詞になることができる。

(5) Ivan_i zhalko sebja_i/ *ego_i
 Ivan・D かわいそうだ 自分・A/彼・A 「Ivan は自分/彼がかわいそうだ。」

(6) Tane_i stydno za sebja_i/ *nejo_i.
 Tanja・D 恥ずかしい のことで 自分・A/彼女・A
 「Tanja は自分/彼女のことで恥ずかしい。」

(7) Sashe_i nuzhny den'gi dlja sebja_i/ (?nego_i.
 Sasha・D 必要だ お金・N ために 自分・G/彼・G
 「Sasha には自分の/彼のためにお金が必要だ。」

(8) Ivan_i nikto ne nraivitsja, krome sebja_i/ (?nego_i.
 Ivan・D 誰も・N NEG 好きだ・PR 以外 自分・G/彼・G
 「Ivan は自分/彼以外誰も好きでない。」

(5)(6)と(7)(8)の違いは、(5)(6)では代名詞が項的な位置にあるが、(7)(8)では付加語的な位置にあることと思われる。

(9)は日本語の例である。ED 名詞が主格形の再帰代名詞の先行詞になっている。

(9)太郎さんには 自分が わからない。(角田(1991)の(8-170))

ロシア語では、(9)の型の文は不可能である。ED 名詞が主格形の再帰代名詞の先行詞になることができない。そもそも、ロシア語の再帰代名詞には、主格の形が存在しない。(9)の型の文が不可能であることが形態的な理由によるのかどうかは断言できない。(9)の型の文は、カンナダ語 (Sridhar 1979) やグルジア語 (Harris 1981) などでも可能である。ロシア語では、(10)のように ED 名詞が主格形の人称代名詞の先行詞になることもできない。

(10)*Ivan_i nravitsja on_i.
Ivan・D 好きだ・PR 彼・N 「Ivan は彼が好きだ。」

ED 構文の主格名詞は、(11)のように再帰代名詞の先行詞になることはできるが、人称代名詞の先行詞になることはできない。

(11) Tanja_i nravitsja tol'ko sebe_i/*ej_i.
Tanja・N 好きだ・PR だけ 自分・D/彼女・D
「Tanja を自分/彼女だけが好きだ。」

3.2. ロシア語では、名詞で名詞を修飾する場合、kniga (本・N) otca (父・G) 「父の本」のように名詞の属格形を用いるが、代名詞で名詞を修飾する場合、代名詞の属格形を用いるのではなく、形態論的に形容詞的な所有代名詞を用いなければならない。

ロシア語の中心的な構文では、主格名詞だけが統語的特徴③「所有再帰代名詞の先行詞になることができる」を示す。主格以外の格を持つ名詞は所有再帰代名詞の先行詞になることができない。したがって、(12)で主格名詞は所有再帰代名詞の先行詞になることができるが、対格名詞は所有再帰代名詞の先行詞になることができない。

(12)Ivan_i udaril Sashu_j v svoej_i/*j/ego_i/*j komnate.
Ivan・N 殴る・PA Sasha・A で 自分の/彼の 部屋・L
「Ivan が Sasha を自分の/彼の部屋で殴った。」

上の(12)で、対格名詞は三人称の所有人称代名詞の先行詞になることができるが、主格名詞は三人称の所有人称代名詞の先行詞になることができない。このように、ロシア語の基本的な構文で、主格以外の格を持つ名詞は三人称の所有人称代名詞の先行詞になることができるが、主格名詞は三人称の所有人称代名詞の先行詞になることができない。すなわち、主格名詞だけが統語的特徴④「三人称の所有人称代名詞の先行詞になることができない」を持っている。一人称、二人称の所有人称代名詞に関しては、主格名詞も主格以外の格の名詞も、その先行詞になることができる。

アイスランド語 (Zaenen et al. 1985)、ヒンディー語 (Mohanan 1994)でも、基本的な構文において、主格名詞だけが統語的特徴③④を示す。また、日本語 (原田 1973、柴谷 1985、Takezawa 1987、角田 1991)、マラティー語 (Rosen et al. 1989)、カンナダ語 (Sridhar 1979)、ポーランド語 (Dziwirek 1994)では、基本的な構文において、主格名詞だけが統語的特徴③を示す。これらの言語の ED 構文では次のようである。アイスランド語 (Zaenen et al. 1985)、ヒンディー語 (Mohanan 1994)、日本語 (原田 1973、柴谷 1985、Takezawa 1987、角田 1991)、マラティー語 (Rosen et al. 1989)、カンナダ語 (Sridhar 1979)では、ED 名詞は統語的特徴③を示すが、主格名詞は統語的特徴③を示さない。それに対して、ポーランド語 (Dziwirek 1994)では、ED 名詞と主格名詞の両方が統語的特徴③を示す。統語的特徴④に関しては、アイスランド語 (Zaenen et al. 1985)、ヒンディー語 (Mohanan 1994)で、ED 名詞は示すが、主格名詞は示さない。

ロシア語の ED 構文で、(13)(14)が示すように ED 名詞は所有再帰代名詞の先行詞にも、三人称の所有人称代名詞の先行詞にもなることができる。

(13)Ivan_i zhalko svoju_i/(?)ego_i sobaku.

Ivan・D かわいそうだ 自分の／彼の 犬・A

「Ivan は自分の／彼の犬がかわいそうだ。」

(14)Sashe_i nuzhny den'gi dlja svoego_i/ego_i syna.

Sasha・D 必要だ お金・N ために 自分の／彼の 息子・G

「Sasha には自分の／彼の息子のためにお金が必要だ。」

しかし、(15)のように所有代名詞が主格名詞を修飾している場合は別である。ED 名詞は三人称の所有人称代名詞の先行詞になることはできるが、所有再帰代名詞の先行詞になるこ

とはできない。

- (15) Ivanu_i nravitsja *svoj_i/ego_i syn.
Ivan・D 好きだ・PR 自分の／彼の 息子・N
「Ivan は自分の／彼の息子が好きだ。」

(15)の型の文に関して、アイスランド語はロシア語と違っている。アイスランド語では、Zaenen et al.(1985)によると、所有再帰代名詞は可能であるが、所有人称代名詞は不可能である。また、日本語、カンナダ語 (Dryer 1982) でも、(15)の型の文において所有再帰代名詞が可能である。

ED 構文の主格名詞は、(16)が示すように所有再帰代名詞の先行詞になることはできるが、三人称の所有人称代名詞の先行詞になることはできない。

- (16) Tanja_i nravitsja svoim_i/*eja_i druz'jam.
Tanja・N 好きだ・PR 自分の／彼女の 友達・PL,D
「Tanja を自分の／彼女の友達が好きだ。」

4. 分詞関係節

ここでは、統語的特徴⑤「分詞関係節で関係節化されることができる」を問題にする。ロシア語の中心的な構文では、分詞を用いて関係節を作る場合、(17)のように主格名詞（厳密に言うと、定形節で主格で現われる名詞）は関係節化できるが、その他の名詞は関係節化できない²。

- (17) [e_i<N> chitajushchij knigu] mal'chik_i
読む・PRT,PR 本・A 少年・N 「本を読んでいる少年」

ドイツ語 (Cole et al. 1980)、マラティー語 (Rosen et al. 1989, Pandharipande 1990) でも、中心的な構文で主格名詞だけが統語的特徴⑤を示す。

ロシア語の ED 構文では、(18)のように主格名詞は関係節化できる。しかし、ED 名詞は関係節化できない。

(18)[e_i <N> nrvjashchajasja Ivanu] kniga,
 好きだ・PRT,PR Ivan・D 本・N 「Ivan が好きな本」

ドイツ語 (Cole et al. 1980) でも、主格名詞は関係節化できるが、ED 名詞はできない。マラティー語に関して、Rosen et al.(1989)は、主格名詞も ED 名詞も関係節化できると述べている。しかし、Pandharipande(1990)は、主格名詞は関係節化できるが、ED 名詞はできないとしている。

5.不定詞従属節

この節では、不定詞従属節と主節の間に成り立つコントロールを問題にする。5.1.で統語的特徴⑥、5.2.で統語的特徴⑦、5.3.で統語的特徴⑧について論じる。

5.1. (19)(20)は、ロシア語の不定詞従属節の例である。(19)(20)では、不定詞従属節の主格名詞 (厳密に言うと、定形節で主格で現われる名詞) が主節の名詞にコントロールされている。

(19)Sasha_i xochet [e_i <N> kupit' knigu].

Sasha・N たい・PR 買う・INF 本・A 「Sasha は本を買いたい。」

(20)Ivan_i rano vstal (dlja-togo), chtoby [e_i <N> uspet' na vokzal].

Ivan・N 早く 起きる・PA ために COMP 間に合う・INF に 駅・A

「駅に間に合うように、Ivan は早く起きた。」

ロシア語には不定詞従属節の複文がいろいろと存在する。しかし、(19)(20)の型をはじめ、どの型の不定詞従属節の複文でも、コントロールのターゲットになることができるのは、中心的な構文で主格名詞に限られている³。中心的な構文で主格名詞だけが統語的特徴⑥「不定詞従属節の複文でコントロールのターゲットになることができる」を示す。

ドイツ語 (Cole et al. 1980)、イタリア語 (Perlmutter 1984)、ポーランド語 (Dziwirek 1994)、ヒンディー語 (Hook 1990)、アイスランド語 (Zaenen et al. 1985)、マラティー語 (Rosen et al. 1989)、カンナダ語 (Dryer 1982) でも、中心的な構文で主格名詞だけが統語的特徴⑥を示す。

ロシア語の ED 構文では、(21)(22)のように主格名詞はターゲットになることができる。それに対して、ED 名詞はターゲットになることができない。

(21) Tanja_i xochet [e_i<N> ponravit'sja Ivanu].

Tanja・N たい・PR 好く・INF Ivan・D

「Tanja は Ivan に好かれない。」

(22) Sasha_i pel (dlja-togo), chtoby [e_i<N> ponravit'sja vsem].

Sasha・N 歌う・PA ために COMP 好く・INF みんな・D

「Sasha はみんなに好かれるために歌った。」

ドイツ語(Cole et al. 1980)、イタリア語(Perlmutter 1984)、ポーランド語(Dziwirek 1994)、ヒンディー語(Hook 1990)でも、主格名詞はターゲットになることができるが、ED 名詞はターゲットになることができない。アイスランド語(Zaenen et al. 1985)では、ED 名詞はターゲットになることができるが、主格名詞はターゲットになることができない。マラテ語(Rosen et al. 1989)、カナダ語(Dryer 1982)では、主格名詞も ED 名詞もターゲットになることができない⁴。

5.2. ロシア語の中心的な構文では、(23)のように主格名詞だけが「tak/takoj/nastol'ko chtoby [...V<INF>...](so /such /so ... as to)」の型の複文におけるコントロールのコントローラーになることができる。主格以外の格を持つ名詞はコントローラーになることができない。

(23) Ivan_i tak rano vstal, chtoby [e_i<N> uspet' na vokzal].

Ivan・N so 早く 起きる・PA COMP 間に合う・INF に 駅・A

「Ivan は駅に間に合うぐらい早く起きた。」

イタリア語(Perlmutter 1984)にも類似の不定詞従属節があり、中心的な構文で主格名詞だけがコントローラーになることができる。そして、イタリア語(Perlmutter 1984)の ED 構文では、ED 名詞と主格名詞がコントローラーになることができる。

ロシア語の ED 構文では、(24)(25)のように ED 名詞もコントローラーになることができ

るし、(26)のように主格名詞もコントローラーになることができる。

(24) Mne_i ne tak veselo, chtoby [e_i<N> pet' s vami].
私・D NEG so 楽しい COMP 飲む・INF と あなた・I
「私はあなたと一緒に飲む程には楽しくない。」

(25) Ivan nastol'ko nravilsja vsem_i, chtoby [e_i<N> sozhalet' o ego ot"ezde].
Ivan・N so 好きだ・PA みんな・D COMP 残念がる・INF について 彼の 出発・L
「彼の出発を残念がるほどに Ivan をみんなが好いていた。」

(26) Dima_i ne nastol'ko nravilsja vsem, chtoby [e_i<N> stat' deputatom].
Dima・N NEG so 好きだ・PA みんな・D COMP なる・INF 代議士・I
「Dima は代議士になれる程にはみんなに好かれていなかった。」

5.3. ロシア語の中心的な構文で、「pered-tem kak / do-togo kak [...V<inf>...] (～する前／～するまで) を従属節にする複文におけるコントロールのコントローラーになることができるのは(27)のように主格名詞に限られている。

(27) Pered-tem kak [e_i<N> poexat' v Moskvu], Tanja_i pozvonila mne.
前 COMP 行く・INF に Moskva・A Tanja・N 電話する・PA 私・D
「Tanja は Moskva に行く前に私に電話した。」

イタリア語 (Perlmutter 1984)、フランス語 (Legendre 1989) の類似の不定詞従属節でも、中心的な構文で主格名詞だけがコントロールのコントローラーになることができる。イタリア語 (Perlmutter 1984) でもフランス語 (Legendre 1989) でも、ED 構文で ED 名詞と主格名詞の両方がコントローラーになることができる。

ロシア語の ED 構文では以下のようなものである。(28)(29)では、ED 名詞がコントローラーになっている。このような文は、容認されるが容認度が多少低い。インフォーマントによっては、このような文をほぼ容認できないとする人もいる。

(28)???Pered-tem kak [e;_i<N> vypit' vodku], mne_i stalo ploxo.
 前 COMP 飲む・INF ウオッカ・A 私・D なる・PA 気分が悪い
 「ウオッカを飲む前、私は気分が悪くなった。」

(29)???Pered-tem kak [e;_i<N> vstretit'sja s Ivanom], mne_i xotelos' stat' pisatelem.
 前 COMP 会う・INF と Ivan・I 私・D たい・PA なる・INF 作家・I
 「Ivan と知り合う前、私は作家になりたかった。」

(30)では、(28)(29)と違って、主節に ED 名詞とともに主格名詞がある。このように主節に主格名詞がある場合、ED 名詞がコントロールのコントローラーになっている文は基本的に容認されない。

(30)*???Pered-tem kak [e;_i<N> poexat' v Moskvu], mne_i vspomnilos' detstvo.
 前 COMP 行く・INF に Moskva・A 私・D 思い出す・PA 子供の頃・N
 「Moskva に行く前、私は子供の頃を思い出した。」

(30)の型の文は、イタリア語 (Perlmutter 1984) やフランス語 (Legendre 1989) では、完全に容認される。

ED 構文の主格名詞は、(31)が示すようにコントロールのコントローラーになることができる。

(31)Eshcho do-togo kak [e;_i<N> stat' aktjorom], on_i nraivilsja vsem.
 まだ まで COMP なる・INF 俳優・I 彼・N 好きだ・PA みんな・D
 「まだ俳優になる前から彼はみんなに好かれていた。」

6.まとめ

上の3節から5節では、ロシア語の ED 構文で、ED 名詞および主格名詞が主語特徴①-⑧を持っているかを明らかにした。ロシア語の ED 構文における主語特徴の分布をまとめると、次のようになる。ED 名詞は主語特徴①「再帰代名詞の先行詞になることができる」を条件付きで示す。その条件とは、再帰代名詞が主格の位置にないこと。主語特徴②「人称代名詞の先行詞になることができない」も条件付きで示す。条件は、人称代名詞が項的

な位置にあること。主語特徴③「所有再帰代名詞の先行詞になることができる」も条件付きで示す。条件は、所有再帰代名詞が主格名詞を修飾する位置にないこと。主語特徴④「三人称の所有人称代名詞の先行詞になることができない」、主語特徴⑤「分詞関係節で関係節化されることができる」、主語特徴⑥「不定詞従属節の複文でコントロールのターゲットになることができる」は示さない。主語特徴⑦「tak ... chtoby [...V<INF>...](so ... as to)などの複文でコントロールのコントローラーになることができる」は示す。主語特徴⑧「pered-tem kak [...V <INF>...] (～する前)などを従属節とする複文でコントロールのコントローラーになることができる」は条件付きで示す。その条件は、主節に主格名詞が含まれていないこと。一方、ED 構文の主格名詞は、主語特徴①-⑧の全てを示す。

ロシア語の ED 構文を主語特徴の観点から他の言語の ED 構文と簡単に比較すると、次のようになる。ロシア語では、ED 名詞も主格名詞も共にいくつかの主語特徴を示す。ロシア語のように ED 名詞と主格名詞の両方がいくつかの主語特徴を示す言語には、イタリア語、フランス語、ポーランド語、ヒンディー語、マラティー語、カンナダ語がある。それに対して、日本語、アイスランド語、グルジア語では、ED 名詞だけがいくつかの主語特徴を示す。ドイツ語では、主格名詞だけがいくつかの主語特徴を示す⁵。ロシア語には、ED 名詞だけが持っていて、主格名詞は持っていない主語特徴は存在しない。しかし、日本語、アイスランド語、グルジア語にはもちろんであるが、ロシア語と同様に、ED 名詞と主格名詞の両方が主語特徴を示す言語であるマラティー語にも、ED 名詞だけが持っていて、主格名詞は持っていない主語特徴が存在する。また、マラティー語やカンナダ語には、ED 名詞も主格名詞も示さない主語特徴が存在するが、ロシア語には、そのような主語特徴は存在しない。

7. おわりに

本稿では、ED 構文と主語特徴（中心的な構文で主格名詞だけが示す統語的特徴）の関係について記述的に問題にした。主語特徴には、ED 構文における分布に関して次の四つがある。(a)ED 名詞と主格名詞の両方が持っている主語特徴。(b)ED 名詞は持っているが、主格名詞は持っていない主語特徴。(c)ED 名詞は持っていないが、主格名詞は持っている主語特徴。(d)ED 名詞も主格名詞も持っていない主語特徴。この四つのうち、ロシア語には、(a)と(c)がある。マラティー語 (Rosen et al.(1989)) には、(a)-(d)の全ての主語特徴があるが、他の言語では、ロシア語のように何らかの偏りがあるようだ。どのような分布を見せる言

語が多いのか、また、個別の主語特徴に関してどのような傾向があるのかという類型論的な判断を下すには、さらに多くの言語のデータが必要であると思われる。

注

* 本稿は日本語学会第 111 回大会で発表した内容に修正を施したものである。角田太作先生、中右実先生、三谷恵子先生、匹田剛氏、佐々木冠氏、西田光一氏に草稿に対して貴重なご助言をいただいた。ここにお礼を申し上げる。ロシア語のデータは 1992 年 5 月から 1994 年 3 月のロシアでの調査とその前後の日本での調査による。Fjodor A. Akimov 氏、Irina M. Voznesenskaja 氏、Marina Ju. Zhukova 氏を中心に多くの方にロシア語のインフォーマントになっていただいた。感謝の意を申し上げたい。本稿で用いる省略記号は次の通りである。A:対格、COMP:従属節標識、D:与格、G:属格、I:具格、INF:不定詞、L:位格、N:主格、NEG:否定辞、PA:過去、PL:複数、PR:現在、PRT:分詞。容認度については、*は容認されないことを示し、?, ??, ???は順に容認度が低いことを示す。

- 1) 「経験者」という一つの意味役割が存在するのか、あるいはいくつかの意味役割に分解すべきなのかは一つの課題である。しかし、本稿ではこのことを追及しない。
- 2) ϵ は明示的に現われていない要素を表わす。<N>は、 ϵ に当たる要素が定形節で主格で現われることを意味する。明示的に現われていない要素が主格を持っていることを意味するのではない。
- 3) 5.2., 5.3.で二つの型の不定詞従属節のコントロールのコントローラーの制約について述べるが、ターゲットについては、この 5.1.の内容が当てはまる。
- 4) Sridhar(1979)は、カンナダ語で ED 名詞がコントロールのターゲットになることができると述べている。しかし、Dryer(1982:311-3)は、Sridhar(1979)の例文では ED 名詞が主格名詞と交替できる述語が用いられており、コントロールのターゲットになっているのは主格名詞であると述べている。柴谷(1985:9)は、日本語の「～たい」の複文で ED 名詞がコントロールのターゲットになることができると述べている。しかし、例文で用いられている述語は ED 名詞と主格名詞の交替を許す「わかる」である。日本語では、ED 名詞も主格名詞もコントロールのターゲットになることができないように思われる。
- 5) Cole et al.(1980)、Zaenen et al.(1985)は、ドイツ語の ED 構文で主格名詞は主語特徴を示す

が、ED 名詞は主語特徴を示さないとしているが、そこで挙げられている主語特徴に関して言うと、ロシア語でも、主格名詞だけが示し、ED 名詞は示さない主語特徴である。

参考文献

- Bachman, Ronald David(1980)*The Subject Potential of the Dative Case in Modern Russian*. Ph.D. diss., Ohio State Univ.
- Cole, Peter, Wayne Harbert, Gabriella Hermon and S. N. Sridhar(1980)"The Acquisition of Subjecthood," *Language* 56. 719-43.
- Dryer, Matthew S.(1982)"Passive and Inversion in Kannada," *Proceedings of the Eighth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. 311-21.
- Dziwirek, Katarzyna(1994)*Polish Subjects*. New York, Garland.
- 原田信一(1973)「構文と意味」【言語】2.2. 2-10.
- Harris, Alice C.(1981)*Georgian Syntax*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Hook, Peter Edwin(1990)"Experiencers in South Asian Languages: A Gallery," in Manindra K. Verma and K. P. Mohanan(eds.) 319-34.
- Kozinskij, I. Sh.(1983)*O Kategorii <<Podlezhashchee>> v Russkom Jazyke*. Predvaritel'nye Publikacii. vyp. 156. Moskva, Institut Russkogo Jazyka AN SSSR.
- Legendre, Geraldine(1989)"Inversion with Certain French Experiencer Verbs," *Language* 65. 752-82.
- Mohanan, Tara(1994)*Argument Structure in Hindi*. Stanford, California, CSLI Publications.
- Pandharipande, Rajeshwari(1990)"Experiencer (Dative) NPs in Marathi," in Manindra K. Verma and K. P. Mohanan(eds.) 161-79.
- Perlmutter, David M.(1982)"Syntactic Representation, Syntactic Levels, and the Notion of Subject," in Pauline Jacobson and Geoffrey K. Pullum(eds.) *The Nature of Syntactic Representation*. Dordrecht, Reidel. 283-340.
- Perlmutter, David M.(1984)"Working 1s and Inversion in Italian, Japanese, and Quechua," in David M. Perlmutter and Carol G. Rosen(eds.)*Studies in Relational Grammar* 2. Chicago, Univ. of Chicago Press. 292-330.
- Rosen, Carol and Kashi Wali(1989)"Twin Passives, Inversion and Multistratalism in Marathi,"

Natural Language and Linguistic Theory 7. 1-50.

柴谷方良 (1985)「主語プロトタイプ論」『日本語学』 4.10 4-16.

Sridhar, S. N.(1979)"Dative Subjects and the Notion of Subject," *Lingua* 49. 99-125.

Takezawa, Koichi(1987)*A Configurational Approach to Case-Marking in Japanese*. Ph.D. diss.,
Univ. of Washington.

角田太作(1991)『世界の言語と日本語』 くろしお出版

Verma, Manindra K. and K. P. Mohanan(eds.)(1990)*Experiencer Subjects in South Asian
Languages*. The Center for the Study of Language and Information: Stanford University.

Zaenen, A., J. Maling, and H. Thráinsson(1985)"Case and Grammatical Functions: The Icelandic
Passive," *Natural Language and Linguistic Theory* 3. 441-83.

Russian Experiencer Dative Construction and Subject Properties

This paper focuses on the experiencer dative construction in Russian. This construction is illustrated in (1) and (2).

(1) Ivanu nravitsja Tanja.

Ivan·DAT like·PRS Tanja·NOM ‘Ivan likes Tanja.’

(2) Tane xotelos’ spat’.

Tanja·DAT want·PST sleep·INF ‘Tanja wanted to sleep.’

I will describe the distribution of subject properties in the experiencer dative construction in Russian. Subject properties are syntactic properties which only nominals in nominative case have in central clause types. Eight subject properties in Russian will be examined. They are related to the following syntactic phenomena: antecedents of reflexive and personal pronouns, relativization in participial relative clauses, control in infinitival subordinate clause constructions. In the Russian experiencer dative construction, nominative nominals show all of the eight subject properties, but experiencer dative nominals present only five of them. I will compare Russian with several other languages which have experiencer dative constructions. Each language shows a different distribution of subject properties from Russian. In the Japanese experiencer dative construction, only experiencer dative nominals present subject properties. In the German experiencer dative construction, only nominative nominals possess subject properties.